平成 30 年度(2018 年度)
日本特別活動学会　第５回　実践事例募集事業

推　奨　実　践　事　例

事例番号　５－７

進路指導で活きる集団活動
―　ホームルーム活動でできること　―

東京都立北園高等学校　　鈴　木　公　美

実践テーマ	進路指導で活きる集団活動 ～ホームルーム活動でできること～　」
実践区分 ○囲み	(学級活動・ホームルーム活動)　児童会・生徒会活動　クラブ活動　学校行事 その他(具体的に、　　)
実践事例の背景、ねらい、意義など	高等学校での進路指導（ここでは卒業後の進路先決定という狭義の指導を指すものとする）は、校長の学校経営方針に則って、進路指導部が中心となり、学年と連携を取りつつ実施される。出口指導と揶揄されることもある狭義の進路指導であるが、生徒にとっては、人生の大きな選択の一場面であり、進路選択、受験勉強、そして大学等の入学試験は、未経験の試練である。生徒が希望の進路先に進むことができるように、ガイダンスの機能を中心に担当するのが進路指導部であり、カウンセリングの機能を主に担当するのが担任である。 四年制大学への進学希望者が多い高校では、「受験は団体戦」といわれる。受験までの取り組みは決して孤独な戦いだけではなく、ホームルーム（以後ＨＲ）や学年といった集団での取り組みが個を更に伸ばすと考えている。本実践では、３年間取り組んできた考査に関するＨＲ活動を通して、個々の生徒は、各自の学習内容や、学習習慣に関する課題を発見しその解決に取り組む。考査の繰り返しの中で身に付いた学習習慣を生かして取り組む受験勉強や、考査を学期ごとの柱に据えながらも、受験勉強と両立させて身に付けた学力、受験計画、手続き、入学試験など進路決定までの緊張を強いられる活動を通して、自らの弱さを知り、自身と向き合うことが人間的な成長につながると考えている。 ３年での取り組みの過程は、OPPA シートに記載させた。（参照『１枚ポートフォリオ評価 OPPA』堀哲夫著 東洋館出版社 2013 年発行）考査、入試への取り組みが個々の生徒にどのような変容をもたらしたかを検証するためである。考査や受験も、特別活動として取り組むことで、生徒の成長を促す貴重な機会になることを明らかにするものである。
実践の時期	平成２７年４月～平成３０年３月

【実践事例】（成果と課題を含む）　４０字×３５行

１　実践内容

本校は、中学での通塾率が８割を超える生徒が入学してくる。塾の指導に素直に随って合格を手にした成功体験があると同時に、自分なりの勉強法をもたない生徒が多い。そこで、１・２年では、考査への取り組みを通して学習習慣を身に付けさせ、各自の弱点の克服に努めさせる。３年になるにつれて、考査で身に付けた学習習慣や学習法の工夫を模擬試験や志望大学の過去問への取り組みに生かし、第一志望合格に向けての対策を練るのに役立たせるのである。

以下(1)・(2)は、年５回の考査への取り組みについてのＨＲ活動である。これらを、まず２年間、考査の度に継続的に繰り返すことで、生徒は自らの学習内容や、時間配分など学習習慣についての課題を見出し、次の考査では課題を解決しようと工夫する。これらの活動は学年で一斉に取り組み、定期的に繰り返されることで、考査への強い意識付けが可能になる。ワークシートは担任や、進路指導部が提供する。

(1) １～２学年

①　範囲の確認（係活動の活性化）と有効な勉強法の共有化

考査の２週間前には、各ＨＲの教科係が考査の範囲に関する情報を収集する。掲示等で明らかになっている以上の内容、たとえば、試験範囲「プリント」とあるのを、「プリントNo.１～７　特にNo.４・５が大事らしい」などの固有の情報収集に努める。

考査２週間前のロングホームルーム（以後ＬＨＲ）では、係生徒の情報を得て各自がワークシートに考査の範囲を整理し、前回の考査についての自身の振り返りや、ＨＲ内で教科ごとに成績が良かった生徒の「やって良かった勉強法」を参考に、今回「取り組みたい学習内容」を書き出す。教科ごとの好成績者は、生徒にとっての身近な教師になることができる。彼らが活躍できるように、ＨＲのモラル向上が必須である。

②　学習進行表と毎日の学習状況シートの記入

各自で書き出した学習内容が、どの程度進んでいるかを週に１～２度進行表に書き込むことで、学習の進捗状況や教科の偏り等を目視できる。

考査２週間前から生徒は、毎朝、前日の学習状況をシートに記入し、回収して担任がコメントする。紙面ではあるが毎日、全員の生徒とのやりとりが可能になる。隙間時間の活用を提案し、必要に応じて面談をすることもできる。勉強時間不足を注意するばかりでは、生徒は本当のことを書かなくなる。時間の使い方を考えさせるためのシートである。

③　考査後の振り返り

各個人での振り返りは考査の点数だけでなく、「やって良かった学習法」「次回は必ずやりたい学習内容」等を記録させ、次の考査の①の活動で「取り組みたい学習内容」を検討する際の参考とさせる。ＨＲ全体の活動として、教科ごとの成績優秀者が、「効果の

あった勉強法」や、生徒が最も興味を示す「二桁順位になるには」「３０位以内に入るには」など、可能な範囲で各自の勉強法を披露し、他の生徒達が参考にする。この活動で「問題集の考査の範囲を５周はやった」など成績優秀者が頑張る姿勢を発表できること、それを評価できるＨＲの雰囲気を育てることも大切である。

(2) ３学年

３年になると自由選択の授業が増え、考査の科目も多種多様になる。考査前の取り組みも、教科ごとの学習内容よりも学習習慣の確立が共通の題材となる。「隙間時間の有効活用」「部活動との両立」「集中できる学習場所の確保」「考査の勉強と受験勉強の両立」などをＨＲ活動で取り上げ、話し合う。

① 受験勉強の学習計画と実施状況についての取り組み

「考査の勉強は、受験勉強に比べて範囲は狭いし、同じクラスの人に分からないことを聞けるので楽だ」という声を聞く。３年では、学期ごとの受験勉強のペース配分の柱に考査を役立てる。考査の前後は受験勉強を縮小する生徒が多いので、考査までにここまでは終える、といった学習計画をたてさせ、実施状況を確認しつつ、考査によって学んだことが身に付いているかを自己評価させる。考査は久しぶりの共同学習の場になる。

夏休みを終える頃から、各自志望校の過去問研究も始まるが、考査や模擬試験で身についたことを生かした取り組みが可能になる。

② 志望校についての受験計画作成

「浪人は出来ないので、どのレベルから受けるか？」「受験日が３日連続するが‥？」など、受験の日程を考えるのが受験計画である。受験料や入学金の支払い日と他大学の発表日を時刻単位で検討することもある。連続３日の入試日や、一日おきに入試日を設定する生徒に、試験が連続する考査期間の自分の有り様を振り返らせ、ベストな状態で臨める受験計画が考えられるよう働き掛ける。

③ 受験申し込み他の手続き

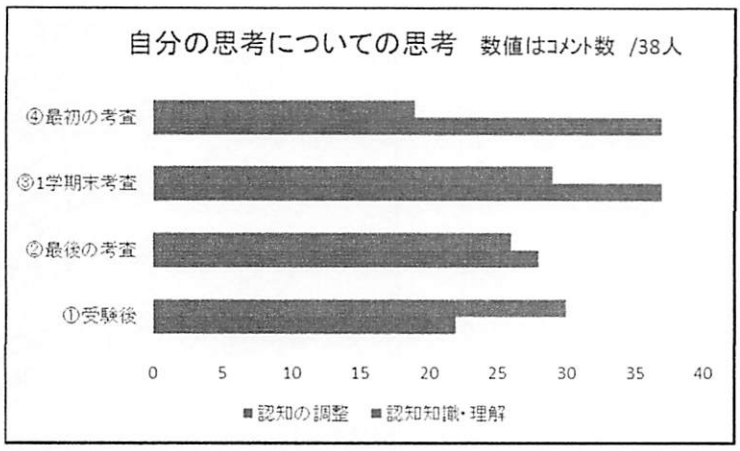
Web 出願が当たり前になりつつある今日、受験の手続きはこれまで以上に生徒自身が行う。「JAPAN e-Portfolio」が実施されるようになると、生徒自身が行うスマートフォン等で、未経験の、期限などの厳しい制限や責任も伴う作業が生じる。今後、ＨＲ活動としてサポートしていきたい分野である。

以上のように、(3)③を除いても、考査と受験とは様々な場面で重なる活動であり、ＨＲ活動で取り組めることは多い。３年生で始めて体験する受験を乗り越えるのに、考査を利用したＨＲ活動は有効であると考えている。

２ 実践結果

この実践では既出の堀哲夫氏による OPP シートを利用した。このワークシートは、生徒自身が自らの変容を知るのに有効である。既出書には「OPP シートの中には、学習者に絶えず自己の変容を促しそれを意識化し、かつ価値づけを行っていこうとする意図的

な働きかけが行われている。」(P87) とある。以下は、３年での最初と最後までの考査や入試を終えて書かせた生徒の記述を詳細に調べ、「知識・理解の認知」(個別の学習履歴に関する知識・理解、自己の学習状況の把握等) と「認知の調整」(学習内容の価値づけ、学習者による変容の理解、学習目標、学習内容全体の自己評価等) (既出書 P123 図 8-2 参照) に分けて両者のコメント数の変化を示した。これまでの考査への取り組みが「知識・理解の認知」を可能にし、受験が近づくにつれて「認知の調整」が意識できるようになり、個々の生徒の成長につながると考えたからである。「認知の調整」については具体例を紹介する。



〔認知の調整に関わるコメント〕

①・毎日やる習慣をつけて、理系科目に割く時間を見直す。
　・計画に少しずれが生じるとそのままなし崩しにしてしまう姿勢を直す。
②・記述に対応できるよう時代背景とかも勉強しよう。
　・細かいミスを防ぐには見直ししかないと思うので、問題を解くスピードを上げていきたい。
③・範囲が決まっていても、結局はその範囲をどこまでやり込めるか、それはこの先の人生の要になってくることは自明の理である。
・「やる気のコントロール」好きな科目と嫌いな科目でやる気に差があり、嫌い‥苦手な科目を避けようとしがちで、そういった時にいかにしてモチベーションを上げて頑張るかという姿勢が大事。
④・何度も勉強のスタイルの確立に向けて工夫をしてきました。誰かのまねをしているだけでは、自身や結果には結びつかないんだということを学べた一年間でした。
・一番大切だと思ったのは、能動的に行動し、迷ったらまずは行動することです。勉強というのはやはり、人から教授されるものであり、いかに人に力を借りて自分自身の力を伸ばすかが大切になる。
・入試は緊張したけれど、いざ試験が始まってしまえば普段学校で受けるテストと気持ちはほとんどかわりがなかった。だからこそ、普段から真剣に解くことが大事だと改めて思った。
・周りの人に支えられてばかりでした‥これからの課題はどんな状況になっても立ち止まらずに前進し続ける力をつけることです。
・本当に大学受験は自分との戦いだなと思った。もうひとふんばりできる力が大切だと思った。
・一番大切だと思ったのは、時間の管理と精神の持ち方だと思いました。管理というのは自分の一番能率の上がる時間を勉強時間として確保して生活するということ。
・入試結果から見ると受験は成功とは言えないけど、精神力がすごく強くなれて、やっぱり「最後までやり抜く」ことが大切だと分かった。
・自分のペースで自分がすべきことを分析して、自分の出来ることはやったという確信が本番の自信につながると思った。
・自分にあったペースで勉強を進めていかないと、どこかで勉強することが嫌になるかもしれない。
・周りに流されない。‥自分が決めたことをやるのが一番大切。受験で身に付いた勉強の習慣を今度は何に生かそうか考え中です。
・ただ、勉強をするのではなく、他に、(受験計画とか)色々な事も考えながら、勉強を続けていくことはとても大変だった。その中での忍耐力や出来ないことがあっても、やるということが大切だと思った。
・結果にかかわらず(入試の)経過は本当に貴重な期間だと思う。普段見られない自分が出てきて、手続きなど全てを一人でこなして、色々経験できた。一般受験できただけで大切なものを学べて良かった。

３　考　察

グラフでは、入試が近づくにつれて、「認知の調整」コメントが増える傾向があり、入試後は「認知の知識・理解」より数が多くなる。具体的な内容でも、年度当初は教科学習の状況について述べたものが多いが、受験後は学習目標や自己評価に関するコメントが並び、自己理解を深めている様を読み取ることができる。以上のことから、特別活動の働きかけによって、考査や受験の経験が自己理解を深め、「生きる力」の育成につながるのに有効であると考えるのである。この力を、いかに個々の生徒の行動に結びつけるかが次の課題となる。

※OPP シートとは、堀氏の OPPA シートをもとに作成したワークシートで、３年でのＨＲ活動の際、継続的に記入させた。